

国立劇場くろごちゃんねる

『四世井上八千代 京舞井上流の魅力』

◎歌詞

おちやめのと

ゝおちや乳人の癖として 背なに子を負い寝させて置いて 狗の子狗の子と言  
うたものは 目なかけそよの 花の踊はな さて 花の踊はひと踊り  
ゝここな子はいくつ 七つになる子が いたいけな事言うた 殿がほしと謡う  
た

てもさても和御寮は 誰人の子なれば 定家葛か 離れがたなやの 離れがた  
なやの 川舟に乗せて 連れて去こやれ神崎へ 神崎へ  
ゝてもさても和御寮は 踊り子が見たいか 踊り子が見たくば 北嵯峨へおじ  
やれの

北嵯峨の踊は つづら帽子をしゃんと着て 踊る振りが面白い 吉野初瀬の花  
よりも

紅葉よりも 恋しき人が見たいじゃて 所々御参りやって とう下向めされ  
咎をばいちやが負いまいらしょう

虫の音

ゝ思いにや 焦がれてすだく 虫の声々小夜ふけて いとど淋しき野菊ひとり  
道は白菊たどりて此処に

誰を松虫亡き面影を 慕う心の穂にあらわれて  
荻よ薄よ 寝乱れ髪の 解けてこぼるる涙の露の  
かかる思いを何時さて忘りよ

兎角輪廻の拙きこの身 晴るる間もなき胸の闇  
雨の降る夜も降らぬ夜も 通い車の夜毎に來れど  
逢うて戻れば一夜が千夜

逢わで戻ればまた千夜  
それえそれえそれよ それが実にさ

ほんに浮世が儘ならば 何を怨みんよしなし言よ  
桔梗刈萱女郎花 我は恋路に 名は立ちながら ひとりまる寝の長き夜に  
ゝ面白や 千草にすだく虫の音の

機織る音は きりはたりちよう きりはたりちようちよう つづれさせちよう  
蝸蝨斯 色々の色音の中に わきて我が忍ぶ 松虫の声 りんりんりんとして  
夜の声冥々たり  
すわや難波の鐘も明け方の 朝間にやなりぬべし さらばよ共にと 名残の袖  
を 招く尾花は ほのかに見えし跡絶えて 草茫茫たる阿倍野の原には 虫の  
音ばかりや残るらん 虫の音ばかりや残るらん

### 深き心

へいろを思案のうちとけて ういの奥の手 知られじと  
廓遊びの仮寝にも あさき夢みず えいもせず  
ただ忘れぬあだ人の  
その面影や慕うらむ へよそめのみ 忍ぶ恋路とみせかけて  
心に刃とぎすまし おもてばかりの酒きげん  
いつかかたきをうつの山 夢にも人に知られじと 遊ぶ遊びはあだならで 思  
いをとげし雄々しさよ

### 竹生島

へさる程に これは又 勿体なくも竹生島 弁財天の御由来 悉しくこれをば  
尋ぬるに 津国難波の天王寺 仏法最初の御寺なり 本尊何かと尋ぬるに 青  
面童子で庚申 聖徳太子の御建立 三水四石で七不思議 亀井の水の底清く  
千代に八千代にさざれ石 巖となれや八幡山 八幡に八幡大菩薩  
山田に矢橋の渡し守 漕ぎ行く船から眺むれば 目波男波の絶え間より 弓手  
にたかき志賀の寺 馬手は 船路で片男波 沖なか遙かに見渡せば 昔聖人の  
誉め給う余国に稀なる竹生島 孝安天皇御代の時 頃は三月十五日 しかもそ  
の夜は己の 巳を待つ辰の一点に 二股竹を相添えて 八声の鶏と諸共に 金  
輪奈落の底よりも  
揺るぎ出でたる島とかや さるによって鳥居にかけし勅額は 竹に生まるる島  
とかや これ竹生島と読ますなり  
弁財天は女体なれども 十五童子のその司 巖に御腰を休らえて 琵琶を弾じ  
ておはします